

言語地図の小問題について

— いわゆる資料図、解釈図、話者の説明地図、「蚕の蛹」の言語分布 —

江 端 義 夫

(1988年9月8日受理)

Some Facts, Interpretation and Expression of a Linguistic Atlas with special reference to various usage of the "pupa of a silk-worm."

Yoshio Ebata

In this paper the author tried to analyse some problems of the linguistic atlas and suggests as follows.

- (1) Each linguistic atlas must be recognized as both an atlas of the data as well as to its interpretation.
- (2) If the atlas possess only the interpretation, it is possible to get it changed to the reader's view. However, the data of the word in usage would give a concrete result.
- (3) Hence, each linguistic atlas shall be accompanied with the data of the word in practice along with the interpretation.
- (4) When analysing the data of the word, it could be compared that whether they are familiar with the history of the same or not.
- (5) This study reports the linguistic atlas of a pupa of a silk-worm, especially NISHAADOCCHI.

In conclusion, we stressed to say that one should try to modernise the methodology of cartography and that should come in use.

○ はじめに

言語地理学は、言語地図を用いて行い言語研究である。したがって、言語地図をどのように作製するかが、大きな関心事である。そこで、言語地図についての諸問題を、あらためて、考えてみたい。

近年、社会言語学の発展に伴い、言語の運用の場面や話者などに配慮しながら、厳密に事象や行動を見つめていこうとする気運が高まっている。言語地図に収載される言語資料に関しても、そのような言語使用についての顧慮が必要になってきている。いままで常識とされてきた事項や知識について、再検討をしてみる時機が来ているようである。

本稿では、『天竜・大井川言語地図』の中、「蚕の蛹」の言語地図を例にして、言語地図の諸問題について考察する。次いで、「蚕の蛹」の言語地図について簡便な解釈を試みる。

一. いわゆる資料図、解釈図について

(1) すべての言語地図は解釈図であると同時に資料図である

言語地図を二種類に分けて、一方を資料図、他方を解釈図と言うことがある。それが常識と見なされている。

しかし、よく考えてみると、資料に基づかない解釈はありえないし、分析の意志を持たない資料の提示は、認めにくい。厳正な意味で、資料図と解釈図との区別はできないであろう。それらは相互に重なり合って、一元的なもののはずである。いわば、資料をありのままに見せる態度を色濃く出した言語地図であるとか、あるいは、解釈の意志を強く打ち出した言語地図であるとか、というような違いはありうる。ただし、それは、見方の程度の差だけであり、内実は同じだと考えられる。

したがって、「すべての言語地図は、解釈図であると同時に、資料図である」と考えるべきであろう。

ところで、調査によって得られた言語資料を、基礎

図上に、どう表現するかは、研究者の良心に任されている。その時、たとえば、音韻法則を実証するために分布図を調整することもできる。あるいはまた、研究者の主観をなるべく加えないように、生のままの音声記号で転写しようという姿勢で、言語地図を作ることもあるであろう。それぞれが、研究者の全人間性に基づくところの解釈の仕事である。どのような言語地図も、言語地図を作った人間の背景を投影しているものである。

(2) いわゆる資料図としての解釈図

「蚕の蛹」について回答された老年層男子の言語現象を、基礎図に書き出したのが、図1である。

この図1には、地点を表示する小黑点の上に、調査カードに記されたままの全事象が、回答された順序に、記されている。一地点に複数の事象が回答されている場合には、上から下へ、即ち、北から南へと並べて書き、それらを弧形の合符で括り、同一地点の併存事象

であることが分かるようにしてある。

考えてみれば、基礎図に事象を、直接書きこむ方式の言語地図は、ロマンス語圏の言語地図において、すでに長い歴史と伝統^(注1)とが見られる。フランスにおける地域言語地図^(注2)も、まったく事象書きこみ方式の、“事象地図”である。

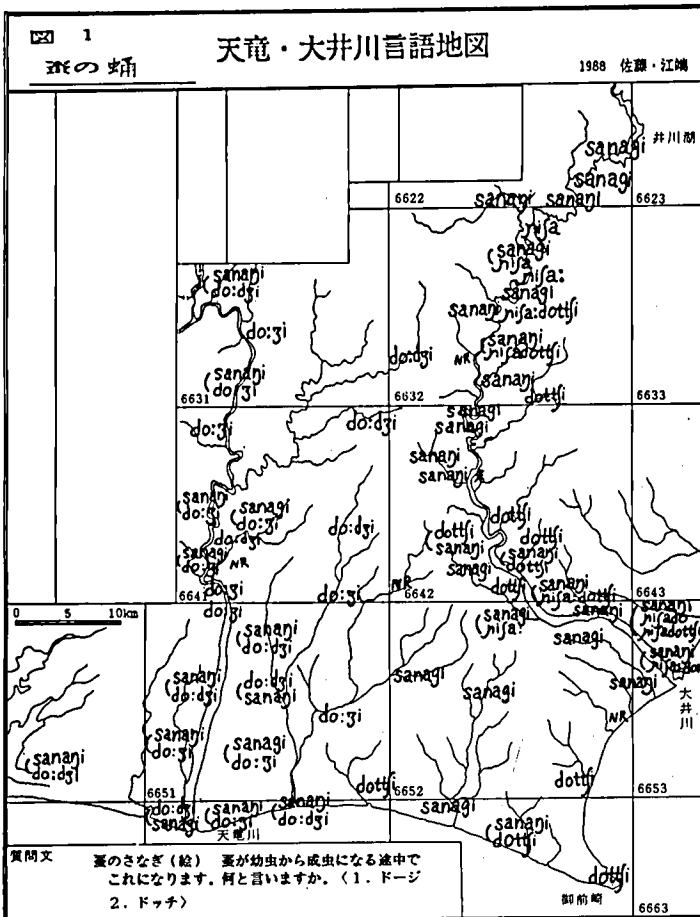
図1では、合符を用いているが、フランスの場合やアメリカのH. Kurathの『LINGUISTIC ATLAS OF NEW ENGLAND』(1891)などにも、それが無い。調査地点のなるべく近くへ、事象が書かれるが、分かりにくいと判断される場合には、矢印でそれらが、どの地点に属するかを指示する、というやり方もとられる。まさに、“資料図”そのものであり、見事に、事象地図らしい科学的なものである。これは、アメリカの例である。

ところで、図1は、“資料図”であろうか。少なくとも“解釈図”ではない、と言われるであろう。しかし、図1も、具体的な音声事実を音声記号によって、

平面上に展覧したものであり、無限の抽象的レベルの中で、一定の位置を占める仕事であると言わなければならない。

一人の調査者が得た資料についても言えることであるが、複数の調査者によって得られた資料であれば、当然、調査能力の差による若干の、結果の差が生じてくる。誰が、どの地点を調査したかについて、H. Kurathのように、いちいち基礎図上に明記しないけれども、図1の背後には、すでに純粹斉一を欠く過程が存在する。これは、避けがたいところである。これを、長所として、解釈の手がかり^(注3)とするか、短所と見て、調査者の限定につとめるかは、目的のちがいで論の分かれるところである。

したがって、図1は、単純に資料図とばかりは、言っておられない。先述のように、調査者の調査能力の差の反映であり、話者の思いつきの差の反映でもある。一人の調査者が、仮に、時間をかけて、統一的に、ていねいな調査を行ったならば、併存語形がもっと増えたかもしれない。あるいは、増えなかったかもしれない。図1では、質問文に基づいて、



複数の調査者が良心的な調査を行い、提示語形についてもなるべく聞くようにした結果、偶然にも、このようであったということにすぎない。図1を「資料図」として固定的に考えることは、建設的でない。やはり、これは、解釈図の一つと見ることが穏当である。解釈図の一つとして、事象地図の形式が選ばれたと見られるものである。ただし、これは、最も基礎的で、未加工の資料に依っているもので、資料図に近いと言えることができる。

なお、資料こそ解釈の基礎であり、すべての解釈を許すべき純粋な資料を残すべきだ、という言語観に立てば、生の言語資料を符号に替える行為などは、およそ考えられないであろう。しかしながら、言語の事実は、いかに客観的な資料として記述しても、それは必然的に、研究者の認識を経て捉えられた事実であり、主観性を排除することはできない。基本的と見なしたい資料においてさえ、主体ごとの解釈が出てしまうのである。

さて、図1を「資料図」として、言語事実を克明に反映したものにするためには、どうしたらいいか。まず、後の図5の話者の説明の図を図1と総合することであろう。これなら、すでに、H. Kurath やジリエロン (註4) やホツエンケッヒェルレ R (註5) の仕事にも見られる。できれば、一地点で多人数に聞き、それぞれのパロールとラングとを資料化するようにしては、どうであろうか。いわば、エドモン (註6) のやり方を、一地点で、特定多人数について行うことである。しかし、これは困難をきわめる仕事となるであろう。

ところで、図1のような言語地図は、日本では、歓迎されないものなのであろうか。言語事実の生の価値を考えれば考えるほど、純粋な言語資料の地図こそ、最もすぐれた解釈図だ、ということもできるはずである。種々の試みの行われることが、望ましいと思う。

(3) 特定の言語現象に注目した解釈図

図2は、解釈図の意図で作製されている。この図には、次の特色が見

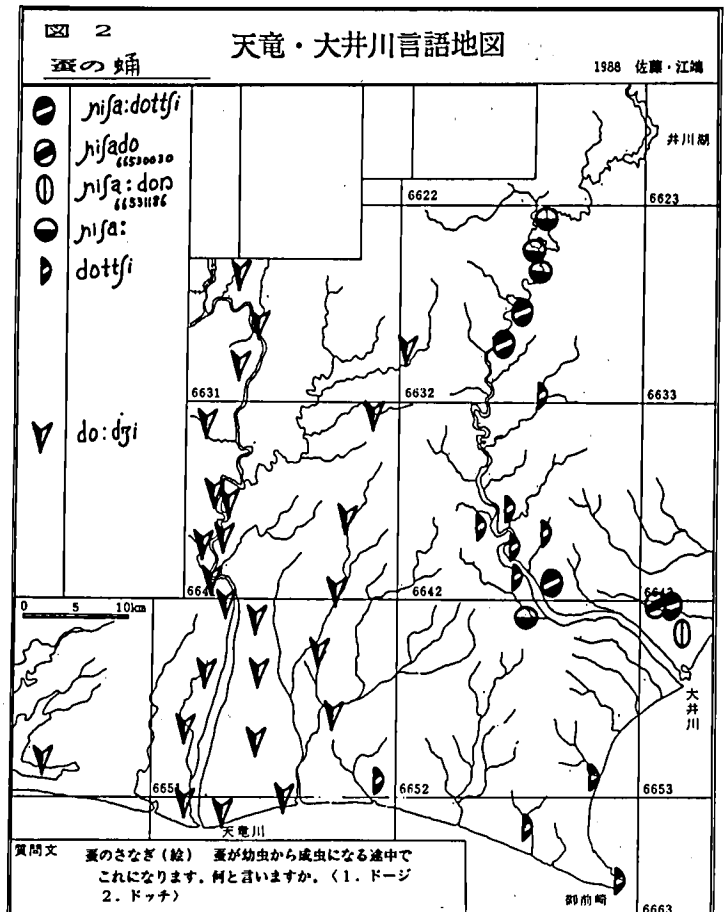
られる。

- 「ニシャー・ドッチ」対「ドージ」との対立を浮き立たせるように、符号が工夫されている。
- 上記の二系事象以外は、符号化されていない。
- 「ニシャー・ドッチ」系の事象が基になって、諸事象の派生と符号化とが考えられている。
- 「ドッチ」から「ドージ」が派生したと考えてもおかしくないように、符号の模様と形との距離が考慮してある。

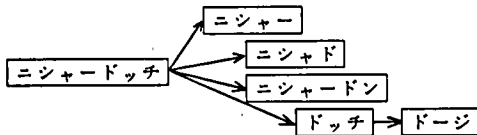
これらの地図学的操作を経て作製された図2には、やはり、制作者の作意が、ちらついて見える。大井川流域の「ニシャー・ドッチ」系の言い方と、天竜川流域の「ドージ」系の言い方との対立が鮮やかであるだけに、大井川下流域の平野部が空白であるのが、気がかりである。

確かに、「明瞭な分布」を描き出せば、言語の歴史は容易に読みとれるであろう。

現に、図2において、「ニシャー・ドッチ」系の語の



派生のありさまは、大井川の上流から下流にかけて、語の位置する様子から、以下のように読みとることができる。



かつては、蚕の蛹を手を持って、「西は何方？」と西方浄土を問う遊びがあったように、たわむれの中で、語が生きていたのであろう。その呼称が、「ドッチ」から「ドージ」へと変化した途端に、意味が不明になってしまったか。そこで、「ニシャードッチ」系の事象分布と、「ドージ」とが別物であるかの如くに対立することになったのであろう。「ドージ」という音は、「童子」を連想することができる。かくして、「ドージ」は、天竜川の流域で確固たる分布を持ち、しだいに東進し始めたようである。そして、古態の「ニシャードッチ」系事象の分布領域へ侵攻するかの如き様子を見せることになっている。

(4) 解釈図の意図を鮮明に出した概括図

図3の「蚕の蛹」は、図2を、さらに抽象化したものである。

図2では、分布地点と符号とが、一対一の対応を成していた。調査された地点には、「ドージ」か「ニシャードッチ」系事象かのいずれかが、認められる。調査したかぎりの地点ではこうであった、という事実に基づいているのである。二種類の対立する事象以外を排除するという大胆な作図法によってはいたが、その範囲内で、解釈の客観性は守られている。

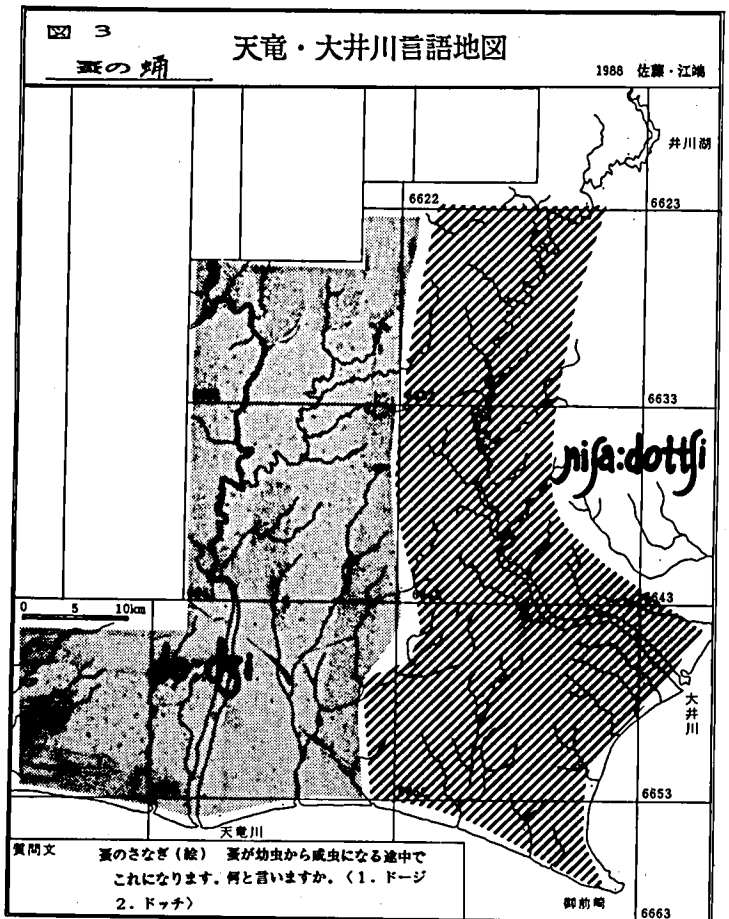
しかし、図3は、未調査地点についても、多分こうであろうという推定の下で作成されたものである。図2が地点に基盤を置く言語地図だとすれば、図3は、地面という広がりにも基盤を置くものとも言える。なお、図3が空論にならないのは、図2で、事象分布と地点との対応が確認されているからである。

また、図3は、天竜川流域の地域に広く「ドージ」が予想されるという蓋然性を表した図である。他方、

大井川流域には、「ニシャードッチ」系の事象が分布し、御前崎にまで至る、ということを表す。

ところで、「ニシャードッチ」系事象の分布内には、図2で確認したように、種々の変化形が見られ、「ニシャードッチ」という語形のみが存するわけではない。即ち、「ニシャー」や「ドッチ」や「ニシャド」などが、全体として「ニシャードッチ」系の分布領域を形成しているのである。いわば、分布の東西対立を示したものと見てよい。

さて、ここで一つ注目しておきたいのは、西側の「ドージ」と東側の「ニシャードッチ」とが接触する地域に、全く、両事象の併存が見られないという事態である。こういうことは、めずらしい。AがBに変化していく時には、中間地帯に、ABの共存が見られるのが通例だからである。これは、東西の事象がぶつかり合う前の状態と言うべきかもしれない。あるいは、生態系に住み分けという共存のルールがあるように、「ドージ」と「ニシャードッチ」系諸事象とは、それ



その分布領域を守って、侵略しあわないということなのであろうか。先には、「ドージ」が「ニシャーロット」系諸事象の分布領域へ侵襲しはじめている、と述べた。しかし、それは、正確ではないかもしれない。新見を挙げれば、強力な「ドージ」の分布と、衰退の一途をたどる「ニシャーロット」系諸事象の分布とが、隣接し、互いに張り合い、微動だにしないで、対峙している状態であると言うべきであるかもしれない。

(5) いわゆる解釈図としての資料図

図4のような言語地図が、日本においては、最も普通で一般的なもののようである。

ただし、国立国語研究所編『日本言語地図』(全6巻、1966~1974)の言語地図を見慣れていると、図4の凡例が三段組になっているところや、凡例上の稀少事象に地点番号が表示してあることに、若干の相違点を見出されるかもしれない。しかし、いまは、それらには拘泥しないでおきたい。また、併存事象に、『日本言語地図』でのような合符(〰)が施されていない。だが、これも問題にはしない。もっとも、併存事象に合符を施すやり方は、世界の言語地図学上、稀な方であらう。たいていは、近接させることで済ませてしまっている。それゆえ、合符は新工夫としての値うちがある。更に、併存符号の方式を別に作り出せば、格別に価値のあることでもある。ここでは、それらの言語地図学的な詳細を等閑に付して、資料図か解釈図かの論点で考えようとしている。

さて、図4と図1とは、根本的には同じものである。「図1・図4」対「図2・図3」というグルーピングができる。即ち、図1のように、得られたデータを平面上に記載しただけでは、立体感や動きが直覚できにくい。そこで、改訂を試み、同じ事象や類似の事象をよせ集め、地理的な関係なども考慮して系統関係を再構築した結果、凹凸や変化も読解できる図4ができる。図1から図4への改訂作業の過程には、地域のことばに対する研究者の見解や愛情がこめられる。いずれにしても、図1と図4とが別物ではなく、同一物であることに変わりはない。双方が、互換性を持つという点で、図1と図4とは同じものなのである。そのように考えつつ、作製されたものだからでもある。

したがって、分布が明瞭に出ている図4のようなのを、すぐにも解釈図だと言われれば、それに対して、多少の説明を付さなければならない。上述のように、図1と図4とは同じものであるとしたのは、根本を貫く精神のことでもある。即ち、図1をじっと見つめ、資料に聞き入る。すると、自然に資料が語り出す。その声をひたすら聞き、交通整理をしたものが、図4で

ある。作ろうとして作るのではない。資料に導かれて行かなくてはならない。だから、図4は、研究者が主体的に解釈した結果の図であるとは考えない。むしろ、資料自らが語るままに、分布図が作られたとする考え方に近いであろう。

故意の作意があっては、客観的なものが見えないのではないかと思う。図1では、それぞれの事象が、無縁仏のように、平等に、静かに座っている、という状況である。それぞれの事象に見合った衣服を着せ、生きものとして価値づけたのが、図4である。

それゆえ、図2や図3は、言ってみれば、不要な図であると言うべきかもしれない。説明の便宜のために使っていくことになる。

さて、その意味では、よく似た操作の一つに、図4における等語線(「ニシャーロット」系諸事象の分布領域を囲った線のこと)がある。これも、説明の便宜のために使うもので、初めから、地理的な平面上に、このような線が引いてあるわけではない。また、方言区画の論議においても、地域が、画然と等語線で分画されるとは考えなくなってきている。それなのに、どうしてこのように行ったのか。それは、線を引くことで、その図4が、資料図から解釈図に変わった、と言われることがあってはならないと思うからである。図4は、線が引いてあっても、これが根本的に資料図であることに変わりがないと言いたいのである。図1と根もとのところで、つながっている。転換が可能である。そういう融通性が、図1と図4との間には結ばれている。こういう点で、図4は、解釈図の形状をしたところの資料図であると言えるのである。

二. いわゆる「話者の説明」地図について

調査の際に、回答された言語事象についての意味、用法、新古、盛稀、習慣、形態、価値などが話者から教示されることがある。これを一口に、話者の説明と言っておく。

言語地図の解釈において、解釈の手がかりの一つとして、話者による「新古の判断」という内省報告(註7)が有効であることは、すでに先行研究が見られ、周知のこととなっている。

さて、言語の歴史を推定することを目的とする仕事であるからには、言語事象が新しいか古いかという情報は、正に、地理的分布の動向を考察するのに有益である。

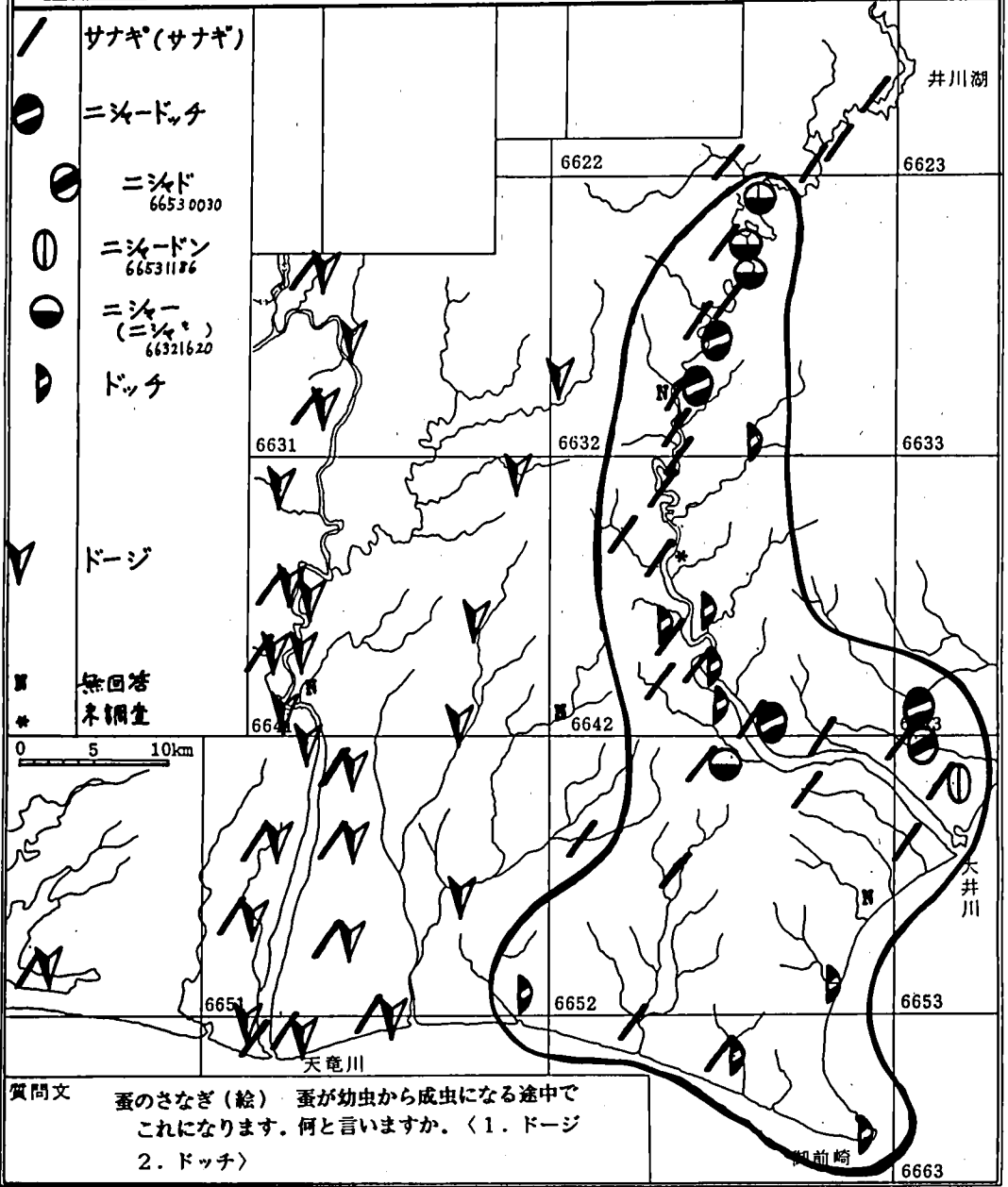
ところで、図5で表したような、「UN-USED」の回答を地図化したものは、恐らく、管見によるかぎり、今まで、極めて稀ではなからうか。従来、実証的研究

図 4

天竜・大井川言語地図

1988 佐藤・江端

蚕の蛹



では、言語事象がその地に「有る」（存在する）ことは発言する（問題にする）が、「無い」（存在しない）ことには言及しない（不問に伏す）ことが、原則であった。なぜならば、話者が「そういうことばは使わない」と回答しても、その端から、そのことばが会話の中で使用されるという実態があるからである。ことばの「非存在」について証明することは、きわめて困難である。

しかしながら、調査の際、たとえば、なぜなぞ式の問いで、しかるべき回答を得たとする。その後で、さらに語形を提示して、「これを言いませんか」と尋ねて、「言わない」と回答されたとする。こういう、語形を提示する形式の質問が多くの地点（あるいは、すべての地点）で行われたとすれば、この結果は、言語地図化することができる。それは、当然、言語地図の解釈の手がかりになると考えられる。少なくとも、UN-USEDの分布図が描けるからである。その分布を見て、USEDの分布図を補填することが可能だか

らである。言うまでもなく、UN-USEDは、当該事象が絶対に存在しないというのではない。あくまでも、「非使用」なのであり、「非存在」ではない。これは確認しておかなければならない。

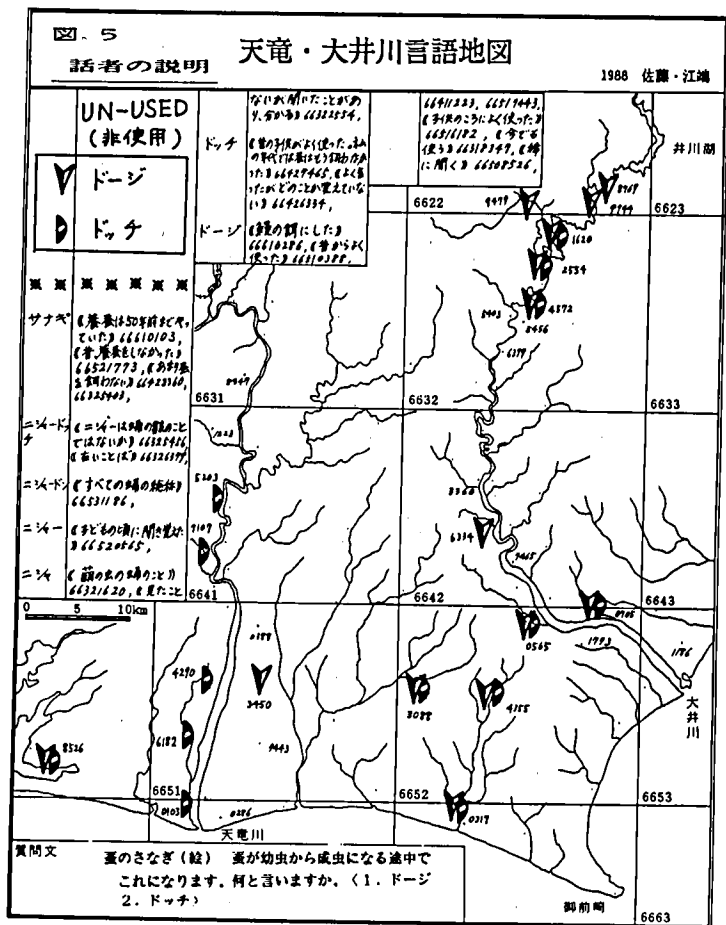
さて、図5の話者の説明地図には、二種類のを併載している。一つは、「ドージ」と「ドッチ」との「非使用」を、回答された地点に押印している。もう一つは、蚕の蛹の全事象について寄せられた話者の説明を、図4の凡例に挙げられた事象の順番に、記している。

はじめに、UN-USEDの分布を見ることにする。図5と図4とを重ね合わせてみよう。すると、図5において、大井川の上流と下流とで、「ドージ」および「ドッチ」を「言わない」と答えている地点が多い。「言わない」と回答しながら、いずれかの事象を回答しているという地点は見られない。大井川流域では、数量的にも、「ドージ」を使わない、とする地点が、「ドッチ」を使わない、とする地点よりも多い。それらを使わない、と回答する地点は、上流と下流とに分かれて分布するということである。

他方、天竜川流域では、「ドージ」を使わない、と回答しながら、実際、「ドージ」の使用を回答している地点が、2箇所に見られ（66513450、66508526）、注目される。意識と実態とにズレが生じているのである。それほどに、「ドージ」は抗しきれない勢力を持っていて、意識では制しきれないありさまでもあろうか。しかし、「ドッチ」を使わないとする地点は天竜川に沿って広く見られ、図4を見ると、確かに、「ドッチ」の分布は皆無である。このように、図4におけるような、通常の能動的な言語地図の背後に、図5で見られるような深層心理、つまり、否定的な回答を利用した言語地図も存するのである。このような揺れ動く心理の一面を客観化した図にも、一定の実証価値（存在意義）があると考えられるのである。

三、「蚕の蛹」の言語分布

天竜・大井川流域における「蚕の蛹」の言語史を、図4、図5に基づ



いて考察してみる。

① 「サナギ」(「サナギ」)

「サナギ」が全域に見られる。この分布には、地域的なまとまりが稀薄である。したがって、これは、共通語としての「サナギ」と見なしてよい。

大井川流域での「ニシャー・ドッチ」系事象の分布が、しだいに崩壊しはじめ、種々の事象を派生している。こういう状況の中で、「サナギ」が分布領域を拡大しつつある。いまは、「サナギ」と「ニシャー・ドッチ」系諸事象が、併存の状況にある。

② 「ニシャー・ドッチ」、「ニシャド」、「ニシャードン」、「ニシャー」

これらを、「ニシャー・ドッチ」系諸事象とまとめて呼ぶ。どのように言語変化が行われたかは、先に、「(3) 特定の言語現象に注目した解釈図」のところで考察した。

大井川の上流に「ニシャー」があって、その下流に「ニシャー・ドッチ」が分布している。周囲分布の理を適用すれば、「ニシャー」の方が古いことになる。しかし、川の上流と下流とは近接しているのだから、機械的に処理しない方がよさそう。しかも、当該域のかぎりでは、大井川の上流の井川湖辺には、新しく、「サナギ」が分布しているありさまである。したがって、かつては、最上流域にも「ニシャー・ドッチ」が行われていたであろうが、早くもそれが、消滅してしまったと考えたいのである。

筆者は、「ニシャー・ドッチ」を原型にして、種々の簡略形や派生形が生じたものかと考えている。その間の事情が、言語地図の分布状況に現れていると思われる。

しかし、静岡県方言研究会、静岡大学方言研究会共編『図説静岡県方言辞典』(昭和62年4月、吉見書店、p. 193)の「かいこのさなぎ」の凡例には、「ニシャ」や「ドッチ」が、基本的な単体として、先に挙げられている。それらが構成されて、「ニシャー・ドッチ」という語形が生じたと言解できるようになっている。この、構成的な解釈には、問題がある。

「ニシャ」と「ドッチ」との二要素が構成されて、「ニシャー・ドッチ」という語形が生じたとは考えにくいのではなからうか。もともと、この長たらしい「ニシャー・ドッチ」(西は何方?)という特定の名称が、行われていたと解釈した方がよいと思う。大井川のあちこちに散在して分布する「ニシャー・ドッチ」という事象は、そういう、古い原型の生き残りの様子を、十分に説明しているのである。柳田国男氏が、

蚕の蛹に「西は何方」の名を付与したのは、関東一府五県は大よそ全部で、其語はニシャドッチで

無ければニシャドッコ、稀にはヌシビッカリ(常陸稲敷郡)、ニシービッシャ(同久慈郡)、ニシンチロリン(下総佐倉千葉)の例もあるのは、少しづつ童詞の形が変わって居た為かと思ふ。それから箱根を越えて静岡県の東半分、次に或距離を隔て、三重県は全部、熊野の東の端までもニドッチの名が知られて居る」(『西は何方』甲文社、昭和23. 6, p. 49~50)

と記しておられるが、蚕の蛹を手にとって、その蛹が頭を振る動作に注目して命名したものであることは、明らかであろう。柳田氏の記述に助けられて言えば、大井川流域における「ニシャー・ドッチ」系諸事象の分布は、関東に優勢な分布の西端にあたることになる。分布が西限であるために、図4で見られるように、「ニシャー・ドッチ」諸事象は、分布がおぼろになり、ぼやけてきている。まさに、「ニシャー・ドッチ」とそれ以外の事象との言語接触の様子がどうなのか、を考えてみるのに都合のよい図である。

③ 「ドージ」

上述では、「ドージ」を、「ニシャー・ドッチ」→「ドッチ」→「ドージ」と推定した。しかし、「ドッチ」が「ドージ」に変化したと考えることは、地理的な近接さからすれば自然である。が、先述以来、「ドッチ」と「ドージ」とが一地点に併存していないことが、気にかかっている。「ドージ」は、どんどん分布を拡大しているのである。「ドージ」は、「ドッチ」からの転と考えるよりも、「蚕の子」という意味から、「童子」を想像したのではないかと考える方が、民間心理に叶っているかもしれない。

ところで、図5の話者の説明地図において、66610286地点では、「ドージ」を(鰻の餌にした)と説明している。遠江の平野では、鰻の養殖が盛んである。養鰻場で、鰻に蚕の蛹を、エサとして与えている。天竜川の下流域や浜名湖周辺には、養鰻と蚕の蛹との間に、別の土地とは違った、深い関係がある。また、この地域では、魚のことを、幼児語で「トト」と言う。そこで、鰻の餌としての蚕の蛹を、「トトのジ(餌)」と呼んでも不自然ではない。これが音訛を起こして、「*ドジ」→「ドージ」に成ったと仮定してみることもできる。

さて、「ドージ」の出自については、三つの説を打ち出してみた。

- a. 「ドッチ」→「ドージ」
- b. 「童子」
- c. *「トト(鰻)のジ(餌)」→*ドジ→ドージ

これら三つのうちのどれが妥当な説であるのか、いまのところ、決め手がない。

以上で、図4、図5についての考察を終える。言語地図に見られた諸事象を、古文獻に当たって確認する作業も、解釈の重要な部分であるが、それらは行わないで、分布だけから言えることに限って考察した。

○ おわりに

本稿では、大きく三つのことを論述した。一つは、いわゆる資料図、解釈図についての論である。その結果、次の三点を明らかにした。

- ① すべての言語地図は、解釈図であると同時に資料図である。
- ② 研究者の見識の相違で、そこに揺れが生じる。
- ③ 言語史が彷彿として現れる優れた言語地図とは、詳細な具体的資料が、話者の説明をも伴って作製されたものである。言語地図の表現形式が、符号地図になろうとも、事象地図になろうとも、それは問題ではない。

二つめは、話者の説明地図についての論である。従来も言語事象についての話者の説明を、言語史解釈の手がかりにすることは、なされてきた。しかし、次の新しい方法が付け加えられた。

- ④ 「そういうことは言わない」（非使用）を言語地図化する。他方、使用された事象を地図化する。話者の説明地図と言語地図との双方を重ね合わせる。こうして、ことば使用の固定と動揺とを知り、言語分布を解釈する一助とすることができる。

三つめは、一と二との統合である。具体的に、『天竜・大井川言語地図』をとりあげ、「蚕の蛹」の図について、言語分布の解釈を試みた。

- ⑤ 当該域における「ニシャードッチ」系諸事象は、諸形態素が、機械の部品を組み立てるように構成されて、できたものではない。単体「ニシャードッチ」が初めに広く分布して、それがしだいに諸要素へと分裂し、派生していったと考えられる。
- ⑥ 言語地図の作製については、いろいろの表現形式が、もっと自在に行われて然るべきである。固定化しようとする傾向は、避けなければならない。

この他にも、言語地図について問題とすべきことがらは多いが、ひとまずの考察を終える。

(注1) 江端義夫「言語地図の地図学的考察——マールブルク大学所蔵の世界の言語地図をみて(一)、(二)——」『広島大学教育学部紀要 第2部』第34号(1985)、第35号(1986)

(注2) Editions du CNRS: LES ATLAS LING-

UISTIQUES ET ETHNOGRAPHIQUES DE LA FRANCE PAR REGIONS 1966~

(注3) 柴田武「言語地理学における調査者間の個人差」『国語学』119, 昭和54年12月。

(注4) Gillieron, Jules: Atlas Linguistique de la France Vol.1, 1902.

(注5) Hotzenköcherle, Ruldolf: SPRACHATLAS DER DEUTSCHEN SCHWEIZ, Vol.1, 1962

(注6) 一人でフランス全土を調査して、ジリエロンが言語研究を完成することができるようにした。フランスでもアメリカでも、調査する人と研究する人とが別々でも、いっこうに無頓着なのが私には不思議に思われる。

(注7) 柴田武『言語地理学の方法』筑摩書房, 昭和44年8月, 13p, 45p.

(参考文献)

飯豊毅一「方言の分布——推量表現「……べー」について——」(「相模女子大学紀要」13, 昭37. 10)

井上史雄「集落内の言語差——下北半島上田屋——」(「北海道大学人文科学論集」11, 昭50)

今石元久「方言事象の伝播研究——岡山県地方の方言を対象にして——」(「広島女学院大学国語国文学誌」4, 昭49. 12)

江端義夫「言語地図の地図学的考察(一)(二)——マールブルク大学所蔵の世界の言語地図をみて——」(「広島大学教育学部紀要 第2部」, 第34, 35, 昭60, 61)

大橋勝男「関東地方域の方言についての方言地理学的研究(9)」(「新潟大学教育学部紀要」19, 昭52)

小野米一「九州北東部方言の方言地理学研究(1)——その基礎作業としての調査について——」(「北海道教育大学紀要」1A, 昭44)

加藤正信「ある方言地図の解釈——佐渡における「ねこやなぎ」の言語地理学的考察——」(「言語研究」42, 昭37)

加藤和夫「詞章を対象とした言語地理学——若狭地方の「蚕とり歌」の場合——」(「佐藤茂教授退官記念論集国語学」桜楓社, 昭55)

鏡味明克「言語地理学における調査語彙——岡山県の県調査から——」(『方言研究の問題点』明治書院, 昭45)

鏡味明克「分布解釈による言語地図の記号の体系的編成について——岡山県を中心に「おふる」の方言を例として——」(「岡山大学教育学部研究集録」34, 昭47)

金田一春彦「比較方言学と方言地理学」(「国語と国文

学」50-6, 昭48)

W. A. グロータース「千葉県アクセントの言語地理学的研究」(「国語学」37, 昭34)

江実「言語地理学」(「国語科学講座Ⅶ 国語方言学」明治書院, 昭10)

小林隆「言語地理学の役割」(「日本語学」1-3, 昭59)

佐藤虎男「大阪市域方言の方言地理学的調査(Ⅰ)」(「学大国文」25, 昭57)

佐藤虎男「琵琶湖畔方言事象分布」(「大阪教育大学紀要」I-26-3, 昭53)

佐藤亮一・沢木幹栄・小林隆・W. A. グロータース「方言文法の発見 — 方言文法全国調査から —」(「日本語学」6, 昭62)

佐藤亮一「沿岸と内陸との対立分布について — 遠州灘沿岸地域における準備調査の結果を中心に —」(「人類科学」38, 昭61)

佐藤貴裕「埼玉県南東地方の言語伝播 — バタン研究の視点から —」(「国語研究」26, 昭61)

真田信治「越飛国境地帯における方言の分布」(「越飛文化」16, 昭47)

柴田武「方言境界の意識」(「言語研究」36, 昭34)

柴田武「カタグルマの方言分布」(「民族学研究」24-1-2, 昭35)

柴田武「方言周圍論」(「講座日本の民俗1」有精堂出版, 昭53)

下野雅昭「濃尾平野の言語分布序説」(「金城学院大学論集国文学編」29, 昭62)

徳川宗賢「ヒキガエル方言の歴史(下)」(「学習院大学国語国文学会誌」15, 昭47)

長尾勇「言語地理学における調査語彙の体系化について」(「日本大学人文科学研究所研究紀要」31, 昭和60)

丹羽一彌「微細言語地図の調査法について」(「東海学園国語国文」23, 昭58)

彦坂佳宜「愛知県方言の分布と歴史ノート(Ⅰ) — 断定辞を中心にして —」(「名古屋・方言研究会会報」第2, 昭60)

藤原与一「瀬戸内海域方言についての方言地理学的研

究」(「広島大学文学部紀要」28-1, 昭43)

馬瀬良雄「ある山村地帯での「もんべ」の方言分布」(「国語学」59, 昭39)

室山敏昭「方言の動態 — 『瀬戸内海言語図巻』に見る —」(「広島大学文学部紀要」37, 昭52)

(付記)

本研究は、九学会連合調査研究「日本の沿岸文化」における日本言語学会の課題研究の一つである。

柴田武先生、野元菊雄先生、国広哲弥先生には、ご助言をいただいた。

調査に際しては、静岡県下の教育委員会に多大のご協力を賜わった。また、共同研究者の佐藤亮一氏をはじめ、沢木幹栄氏、下野雅昭氏、杉戸清樹氏、小林隆氏、伊藤大介氏、高永茂氏には、調査に参加していただいた。深く感謝申しあげる。最後に、各地の方言話者の方々からは、親切に調査に協力していただき、貴重な言語資料を得ることができた。心から感謝の誠を表すしだいである。

(追記)

校正時に気が付いたことである。高橋顕志氏がすぐれたご論考(「廃物廃語と無回答」『国語学』143, 1985)を公表しておられる。それはグロットグラムを用いて、若年層に多く見られる無回答(NR)を分析し、物(民具)の消滅と言語継承との関係を実験的にとらえた興味ぶかい仕事である。

拙稿はそれとは次の点で違っている。①面における考察であること、②項目が昔の生活に身近なもの(蚕の蛹)であること、③話者の説明の言語地図であること、④UN-USEDの言語地図であって、No-Responseの言語地図ではないこと、などである。

いずれにしても、近似の問題がいろいろの方法で検証されていくことは、斯界の発展のために望ましいことだと思われる。話者の説明地図についてさらに研究が栄えることを期待したい。